

No.133

2001.
3.31

岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)

岐阜県博物館内

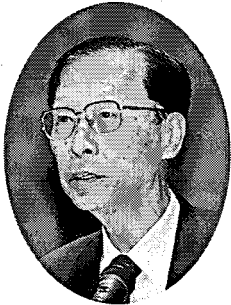
岐阜県博物館協会

TEL 0575-28-3111

振替名古屋637909

「まちかど博物館の推進」

県歴史資料保存協会名誉会長・中山道ミニ博物館長 太田三郎



去年は文化財保護法の制定50周年を迎えました。文部省が中心になって10月30日国立劇場で天皇・皇后両陛下ご臨席のもと、三権の長らも出席し盛大な式典が挙行されました。

その時の天皇陛下は正倉院の保存、法隆寺壁画・金閣寺・首里城の焼失の事等から文化財は歴史の証であり、資料の保存がいかに大切なことであるかについて話され、全参列者深く感銘しました。

岐阜県は文化財の宝庫で、指定数は日本屈指です。この機会に県民一人一人がその保存に尽くされた先輩に感謝すると共に文化財の大切さを理解し、その保存に一層の努力の必要を啓蒙したいものです。

中山道ミニ博物館

本館は平成3年4月12日岐阜県のまちかど美術館・博物館の第一号として開館しました。梶原知事は岐阜県の文化水準を上げる方法として、県内の個人や法人の所有している文化財や美術品・民俗資料等を地方で公開する「まちかど美術館・博物館」を100ほどつくるという、県内丸ごと美術館・博物館構想を発足させました。開館式での知事祝辞の一節には、「・・・中山道ミニ博物館はこの事業の主旨に合致するものであり、第一号の先駆的事业として今後の推進の導火線ともなるべきものであると確信している次第・・・」とあり、その責任の重大さを感じています。

本館は文字通りのミニ博物館で、平成2年に新築した木造2階建の一階(土蔵造)約90㎡に展示室・図書室・玄関トイレがあります。展示室は中山道十六宿・垂井宿・美濃路二宿の3コーナーがあり、近世の交通史料や旅用

具等を展示し、年々その補充をしています。特に年間2～3回の特別展に力を入れてきました。

- 平成6年 郷土の画家長原孝太郎画展、
中山道地図絵図展
- 平成7年 映像で見る垂井駅展、
涼を呼ぶ扇子・団扇・手拭展
- 平成8年 垂井の花椿画展、
旅・街道浮世絵展、古代郷土史展
- 平成9年 養老の滝画展、旅道中着展
- 平成10年 長原孝太郎2回展、
全国の古名橋展、旅道中双六展
- 平成11年 武藤六郎街道版画展、
美濃路特別展、中山道ポスター広告展
- 平成12年 関ヶ原合戦400年特別展、
松尾芭蕉肖像画展

また、近年、本館の交通史料に対し県内外の公館(地元の垂井、関ヶ原、大垣、山東町や岐阜、笠松、美濃加茂、御嵩、中津川、県外の東京江戸博、長野県諏訪等)より借用希望があり、貸出し事業も行っています。

本県のまちかど美術館・博物館構想は他県より早く発足しました。しかし、助成制度や指導制度もなく、ただ年1回の講演会の開催だけでは物足りません。今後、問題点の違う企業と個人とは分科会か専門部をつくり、それぞれの問題解決の研究をし、その指導を受けられるような組織及び場をつくって頂けたら有り難いと思います。

平成13年はこの制度が出来て10周年です。この構想をさらに充実させ、文化性の高い、住み良い岐阜県づくりに一層の努力を願うものです。

姫路市駅前の金沢さんの礼手紙

「・・・ミニ博物館は失われ行く物を執念と思われる様に集めて下さり昔の旅を彷彿として感じました・・・」

第48回全国博物館大会報告

「21世紀に相応しい博物館づくりを目指して」

日時：平成12年11月9日（木）～10日（金）

会場：仙台市 仙台市民会館

参加：324名

平成12年度の全国博物館大会が241の博物館関連施設から324名が参加して開催された。



開会式では、永年勤続者30名・顕著な功績が有った者4名・寄付者5名が表彰され、2名に棚橋賞が授与された。

全体会議では文部省及び文化庁から、博物館の現状、博物館の職員講習・研修、公・私立博物館に対する補助制度、親しむ博物館づくり事業等の振興対策、登録美術品制度等多岐に亘る行政報告があった。

午後からは「21世紀に相応しい博物館づくりを目指して」をテーマにシンポジウムが開催され、最初に主催者から趣旨説明が行われた。政府の地方分権の推進、規制の緩和の方針を受けて、博物館設置の拠り所であった「公立博物館の設置及び運営に関する基準」の弾力化が図られており、それに代わる新しい指針として、日本博物館協会では、平成10年度から「博物館の望ましいあり方」について調査研究を行って報告書を作成している。シンポジウムはこの報告書を博物館界がフォローアップするためと説明された。

各パネラーから分担した調査研究分野について報告書に沿って説明が行われ、家庭・学校・地域社会とのつながりをいかに図っていくか、それを支える博物館ネットワークをいかに構築するかなどが話し合われた。

・ボランティアの受け入れや参加体験の重視等社会の変化に対応できる活動が行われるようになったことを踏まえ、キーワードを「対話と連携」とした。

- ・博物館は学校の補助機関から、対峙・協調する時代になり、教育改革によって生涯学習時代に入って社会的需要は大きくなった。
- ・今ある博物館資源で出来ることは何かを問い、達した答えが「対話と連携」である。博物館で働く人が館の目的を十分に話し合い目標を確認し実行することが必要である。
- ・博物館法の設置基準に定める資料の定義に当てはまらない資料を活用する博物館が存在するようになり、幅広い設置基準の見直しが必要となっている。
- ・経済的にも資料の存在状況からも資料収集の時代は終わり、各博物館が今までに集積した資料の相互の再活用が必要である。
- ・世間へアピールするには、やれることは何でもやろう、手作りで。
……等と討議が行われた。

第2日は二つの分科会が開かれ、「家庭・学校・地域社会とのつながり」、「博物館ネットワークの形成」について、シンポジウムでの討議を基にパネラーと参加者が意見交換を行った。

全体会議では、

- 1) 組織としての常設委員会を設ける
- 2) 博物館行動基準を設けるための委員会を設ける
- 3) イコム（国際博物館会議）では毎年5月8日を博物館デーとして活動している。日本でも全国統一のミュージアムデーを設けるため、組織の機関に図って実行していきたい。

など、3つの提案がなされ了承された。

「教育改革が叫ばれているが、それぞれの立場で相手を非難する風潮と、それぞれの教育分野がもたれあって責任を押しつけている。小さな・大きな博物館が21世紀に向けて対話と連携のキーワードのもとで博物館が活動する事が大切である。」との会長挨拶で大会は終了した。

（岐阜県博物館 伊藤金夫）

第48回岐阜県博物館協会会員研修会報告

演題：「装潢と文化財保存・修理」

表具士 坂田雅之氏

「見て、触れて、造って楽しく学ぶ」

化石レプリカづくり」

岐阜県博物館学芸員 古田靖志氏

期日：平成12年11月21日 13:30～15:00

場所：岐阜県博物館

参加：21名

1. 装潢と文化財保存・修理

最初に、装潢というあまり聞きなれない言葉の説明があったあと、掛幅、絵巻物、障壁画、額装、書籍の修理についての話となりました。特に掛幅の肌裏をとる方法や補修用の紙の作成などここ10年の補修方法の変遷はとても興味深く感じました。



坂田氏

2. 見て、触れて、造って楽しく学ぶ

化石レプリカづくり

続いて、化石レプリカづくりについて模擬的な作業を通して発表がありました。学習指導要領に博物館の利用が明記されるなどより学校との連携が求められる中、多くの参加者の興味を集め、材料の入手方法など具体的な質問も出ました。



古田氏

講座、事例発表が終わった後、開催中の特別展「すばらしき東濃の自然、再発見～巨大ヒノキが見てきた生き物たち～」を学芸員の解説を聞きながら見学しました。

(岐阜県博物館 説田健一)

第87回岐阜県博物館協会公開講座報告

演題：「岐阜県内に見られる須恵質埴輪の様相」

日時：平成13年2月17日(土) 14:00～15:30

場所：岐阜市歴史博物館 講座室

講師：岐阜市歴史博物館学芸員 稲川由利子氏

参加：27名



(講演要旨)

4500基以上の古墳が存在する岐阜県内において、埴輪が出土している場所は56ヶ所に過ぎない。その出土は飛騨地方には1例も知られておらず、西濃から中濃に偏っている。このうち、須恵器のような灰色の色調と堅い焼成をもつ須恵質埴輪が認められるのは、御嵩町の美佐野高塚古墳と可児市の宮之脇11号墳、大野町の南屋敷西古墳と不動塚古墳、岐阜市の船来山96号墳、富加町の後平茶臼山古墳ほか3ヶ所である。岐阜県内で須恵質埴輪が出土することは昭和初期から認められていたが、近年では成形や整形の技法に重点を置いた認識から「須恵器系埴輪」の名称が多く使用されており、色調や焼成具合についての定義は未だ整理されていない状況にある。

最近の胎土分析から、須恵器と埴輪の両方を生産していた春日井市の下原古窯産であることが確実な美佐野高塚古墳と宮之脇11号墳出土の埴輪は、ろくろを用いて整形を行い、針金状工具による底部設定でついた接地面の痕や基部のズレの痕があることから須恵器系埴輪とされている。しかし、中には焼成が不十分な黄褐色の製品も含まれており、色調や焼成だけでは須恵器工人のもとで作られた埴輪であるか否かを判断することは不可能である。また、底部設定に使用される針金状工具については、必要性があまり認められないことがすでに指摘されているが、製作途中でこの工具を外す際につくとされているズレが、底部整形後についてのものであることから見直しが必要である。

(機関紙委員 岐阜市歴史博物館 稲川由利子)

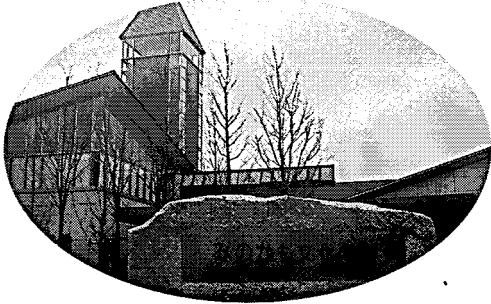
みのかも文化の森

美濃加茂市民ミュージアム

〒505-0004

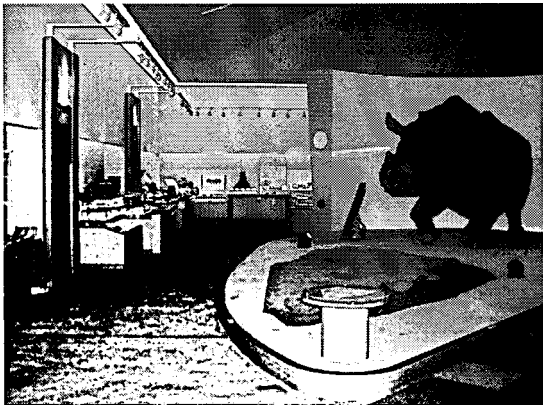
美濃加茂市蜂屋町上蜂屋3299-1

TEL 0574-28-1110



9ヘクタールの広大な森の中に、木の香りが漂う新しい博物館が誕生しました。森の中の散策路を歩きながら、四季折々の動植物が観察できる自然環境の中で、「美濃加茂市民ミュージアム」と「美濃加茂教育センター」、2つの施設が複合して活動の輪を広げています。まさに「ひと・もの・自然と触れあいながら、あたらしい発見ができる森」というコンセプトの通り、市民の参加を積極的に受け入れて学校教育と提携した形で、歴史的資料を活用したり身近な自然と親しむことができる博物館です。

博物館の常設展示は、この地域の自然、歴史、そして文化について「川とみちと人」をメインテーマとしているため、わかりやすく知ることができます。



その内容は、まず大地をかたちづくるものとして、美濃加茂市とその周辺の大地2億年の歴史を物語るチャートや、砂岩、凝灰角礫岩、化石林などをはじめ、大型哺乳動物カニサイ

の足跡の化石が市内の木曾川河床から見つかったことから、その動く模型をはじめ、哺乳動物や淡水魚、広葉樹、針葉樹の植物化石が展示されています。

次に、川のほとりで生きた人々の暮らしの生活ということで、市内の遺跡から出土した旧石器時代から縄文、弥生、古墳時代の道具の展示があり、この当時に暮らした人々の文化を紹介しています。河川を利用した木材運搬の歴史は古く、木曾から運ばれるイカダの中継地点として、この地域は重要な役割を担っていました。

また、江戸時代のみちとして、この地域は中山道の難所、太田宿として太田の渡しを控えた重要な宿場として栄えました。そうした関連資料が展示されています。

そして最後、郷土の人物として、美濃加茂市で生まれた坪内逍遙、津田左右吉などの業績や人柄を紹介しています。

その他に美術工芸展示室があり、地域にゆかりのある作家の作品を展示しています。

企画展示室では、企画展が年に4回催され、訪れた時には「親子の対話 岡本一平・岡本太郎展」が開催されていました。

市民参加型でありながら教育との連携をおこなう博物館ということで、ここではボランティアの活動も盛んです。既に現在130名の方が5つの分野にわかれて活動があるそうです。来館者に展示の解説などをおこなう「展示ガイド」、美術工芸などの創作活動を支援する「アートボランティア」、生活体験館(まゆの家)や民具展示館などでの生業を説明する「生活体験館ボランティア」とそこでの郷土食や料理を実演する「伝承料理ボランティア」、そして学校教育現場との連携という機能を補佐している「学習支援ボランティア」といった5つの分野があります。

市民が主人公となって活動をおこなえる環境の中で、市民の自由な発想と自発的な活動による成果が蓄積され、この森の原動力となるのでしょうか。学校教育と連携しながら、さまざまな体験を通して歴史や文化、自然とふれあう学習の場となることが期待されています。

【交通】 JR美濃太田駅北口から徒歩17分

【開館時間】 9:00~17:00

【休館日】 市民ミュージアム 月曜日・第4火曜日

【入館料】 無料(ただし企画展は有料)

(機関紙委員 内藤記念くすり博物館 野尻佳与子)